右京七条一坊・朱雀大路の調査

―第168-9次

1　はじめに

本調査は、大和平野支線水路改修工事にともなう事前調査である。本事業の飛鳥工区第２号幹線（右岸）工事のうち、奈良文化財研究所は、2010年度に実施した第166次調査（『紀要 2011』）以北を担当しており、2011年度が２年目にあたる。調査対象地域は、史跡朱雀大路、右京七条一坊にあたり、周辺の調査では、第17・17-2次調査において朱雀大路両側溝や西一坊坊間路西側溝を（『藤原概報 6・7』）、第62次調査では古墳時代の竪穴建物や藤原宮期の掘立柱建物などを確認している（『藤原概報 20』）。

2011年度の工事範囲は、総長約223mである。うち、市道飛騨町木之本線の新規掘削をともなう総長約100mの工事区域は、西区（約10m×１m）、東区（約10m×１m）を発掘調査し、中央約80m分を立会調査とした。これ以外の工事範囲は、既設管の改修ないしPIP工法により新規掘削をともなわないため、立会調査で対応した。立会調査も含む調査面積は336㎡、うち発掘調査面積は20㎡である。調査期間は、2011年11月21日から断続的に2012年３月23日までで、実働42日間調査をおこなった。以下、発掘調査対象とした西区・東区の調査知見を報告する。

2　調査成果

西区の概要　基本層序は、アスファルト（11㎝）、砕石（21㎝）、道路造成土（110㎝）、水田耕作土・いわゆる床土（35㎝）、古墳時代の包含層（暗灰色または青灰色砂質土、15～20㎝）、いわゆる地山（緑灰色粘土）であり、遺構は暗灰色砂質土上面で検出した。本調査区では、南北方向の溝１条と炭溜りを確認した。

南北溝SD11069　幅1.3m、深さ20㎝の素掘溝である。第17次調査で検出したSD1856（西一坊坊間路西側溝）と対応する溝となる可能性があり、その場合、心々間距離は推定約5.6mである。ただし、計画上の坊間路の規模である20大尺（約7.1m）と比して幅が狭いこと、推定位置から約1.5m西で検出したこと、古代の遺物は出土していないことなど、さらなる検討を要する。

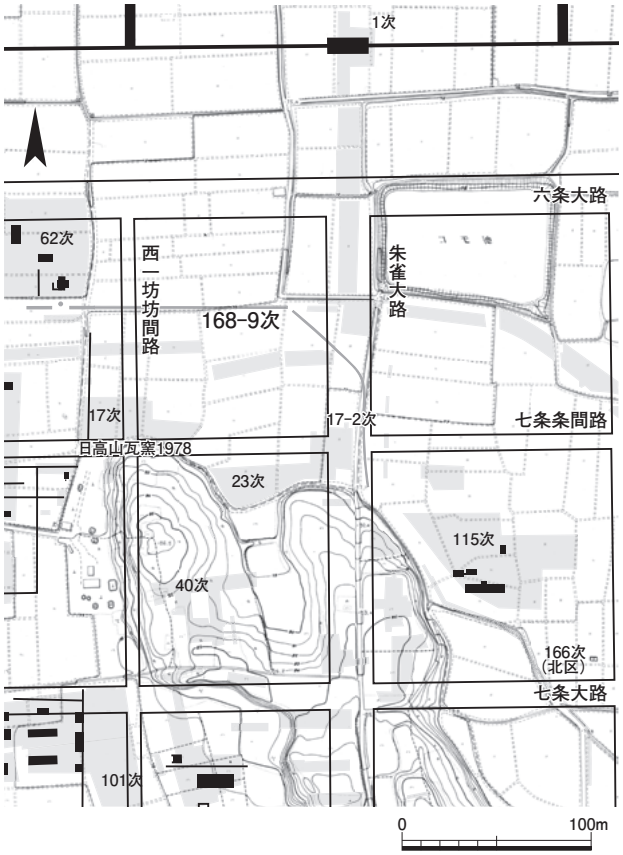

図134　第168-9次調査区位置図　1：4000

炭溜りSU11070・11071　調査区西端で藤原宮期の遺構検出面より10㎝下の青灰色砂質土面で確認した。規模は、調査区西端から東へ約1.8mのところまで広がり、厚さ１㎝程度。底では２基の炭溜りに分かれる。炭は、土に混じった状態で検出された。古墳時代前期の高杯や甕がまとまって出土した。

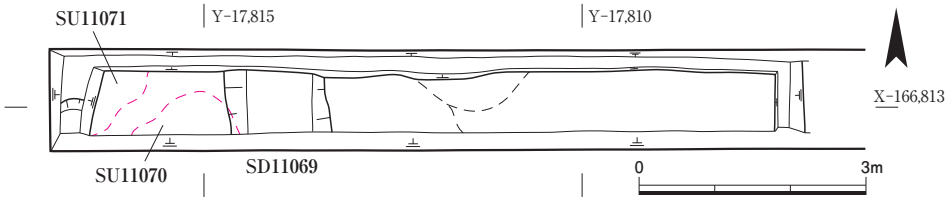

図135　第168-9次調査西区遺構図　1：100

図136　西区検出状況（東から）

図137　東区南北溝SD11072（西から）

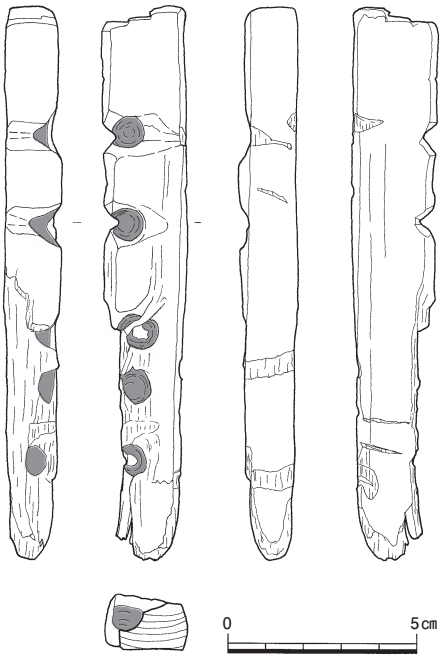

図138　第168-9次調査出土火鑽板　1：2

東区の概要　基本層序は、アスファルト（10cm）、砕石（50cm）、道路造成土（90cm）、水田耕作土・いわゆる床土（20cm）、弥生時代から古墳時代までの包含層（暗青灰色砂質土、20～30cm）、いわゆる地山（緑灰色粘土）であり、遺構は暗青灰色砂質土上面で検出した。本調査区では、南北方向の溝１条を検出した。

南北溝SD11072　幅1.5～1.7m、深さ25cmの素掘溝。北で西に約20°振れて斜行する。出土遺物から、古墳時代中期以降につくられ、７世紀後半には完全に埋没していたと考えられる。

遺　物　東区・西区のいわゆる床土・包含層から、弥生土器２点、古代の須恵器・土師器片、火鑽板１点（ヒノキ、樹種同定による）が出土した。土器はいずれも細片である。

３　まとめ

今回の調査は、農業用水路改修工事にともなう幅１ｍという狭小な調査区ではあったが、条坊側溝の可能性がある南北溝や古墳時代の遺構の存在を確認することにより、藤原京の条坊研究や京造営以前の状況が窺われる成果をあげることができた。藤原京条坊遺構の遺存状態は概して良好であり、今後も周辺地域の調査を継続する必要があろう。**（山本　崇・高橋　透**／宮城県多賀城跡調査研究所**）**

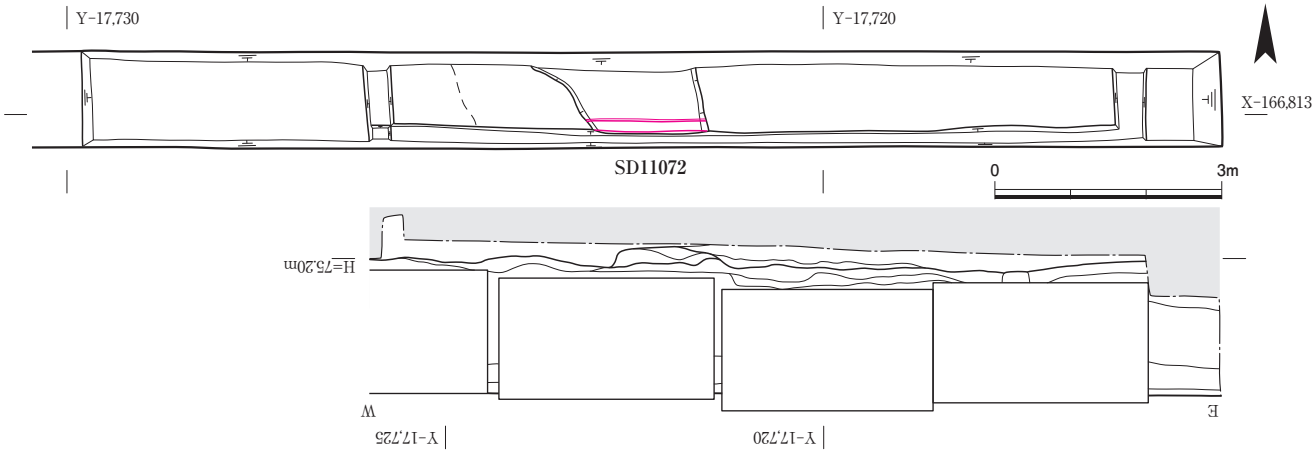

図139　第168-9次調査東区遺構図・南壁土層図　1：100